研究発表

珍化石テヅルモヅル

加藤寿俊（佐世保市立西高校）

私が学校を教え始めて，6カ月くらい経ったある日，一男子生徒が「これは化石ですか，そうじゃないですか」と言って，化石らしきものを持ってきた。それは砂岩中（おそらく地層面）に蝶の羽根のような，花びらのような痕跡が保存されていた。ためつすがめつながめてみたものの，はっきりと化石だと断定はできなかった。そこで長崎大学地学教室の鎌田助教授に鑑定していただいたところ，「テヅルモヅルという動物の化石のようだな，たいへん珍らしいよ」と言われ，さっそく動物図鑑を調べてみた。

テヅルモヅルというのは棘皮動物門，蛇尾綱，枝腕目に属するもので，5～10㎝くらいの5角形をした“盤”から20～25㎝くらいのつるのような管足を出している。比較的に浅い海に生棲している。海岸を歩いていると，時々砂浜に打ち上げられていることがある。本邦近海では相模灘，駿河湾，東シナ海，朝鮮海峡，日本海，オホーック海，から産出する。

この珍らしい化石を発見した，石田盛興君（本校3年在学中）の話によると，「昭和39年の夏，岩石に興味を持ち，市内大久保小学校裏手の山中で，道路工事現場の割石から偶然見つけました」ということである。発見現場は，弓張岳登山バス道路の中腹より山中に約200mくらい入り込んだところで，約2m幅の道路の北側の露頭附近である。石田君と，近辺を調査してみたところ，砂岩，頁岩の互層形式の堆積構造をなしている。この化石が産出した部分は，砂岩層がかなり厚く，（層厚5m以上）で，すぐ上位にはやや炭質化した頁岩がのっている。砂岩は中粒で，やや白っぽいオレンジ色をして，中には雲母を多量に含んでいる。地質調査所月報第13巻第11号の層序表によれば，佐世保層群の最下部にあたる相浦層の上部に属するようだ。現在，佐世保炭田南部で最もよく稼行されている大瀬五尺層より約150～200m位下になるようだ。相浦層は，上部・中部・下部の三層にわけられており，上部の最下限は真申（まさる）化石帯となっており，この化石が産出した場所も，この化石帯に相当する部分であろう。真申化石帯の中から海棲の化石も報告されているし，テヅルモヅルが棲息している場所から考えても，この附近一帯は，一度はこの時期（中新世前期の終り頃）に海進の時期があったと考えてよいと思う。

化石標本は保存があまりよくないので，現棲のものとは充分比較することができない。しかし五角型をした盤の直径は11㎜で，腕は中心より15㎜位の所ですでに分枝する様子が認められるので，比較的小型の種類に属する。現在までに，この種の化石は我が国で報告されたことがないと思う。標本は本校の地学教室に保存している。最後にこの珍しい化石の所属を明らかにする糸口をつけて下された，長崎大学鎌田泰彦助教授に感謝する。

× ×